

## 看護大学生の自尊感情と両親の夫婦関係コミットメントへの 認知との関連

刀根洋子 杉田理恵子 小野寺幸子 大久保麻矢 篠原好江 望月千夏子

(Yoko TONE Rieko SUGITA Sachiko ONODERA Aya OHKUBO  
Yoshie SINOHARA Chikako MOCHIZUKI)

### 【要約】

〈目的〉 青年期の子から見た両親の夫婦関係コミットメントへの認知と自尊感情との関係を検討する。

〈方法〉 都内の看護大学生374名（有効回答率、85.8%）の回答を分析対象とした。自尊感情尺度（山本、松井、山城、1982）と夫婦関係については、「両親の結婚生活コミットメント認知尺度（宇都宮、2005）」を使用した。

〈結果〉 自尊感情尺度得点平均値は33であり、性別、学年、家族形態による有意差はなかった。両親の「結婚生活コミットメント認知尺度」の下位尺度得点は、第1因子「存在の全的受容・非代替性」34.4/32.3（父親/母親）、第2因子「社会的圧力・無力感」17.8/19.6（父親/母親）、第3因子「永続性の観念・集団志向」17.8/18.2（父親/母親）、第4因子「物質的依存・効率性」11.9/11.6（父親/母親）であった。4因子尺度得点に、性差及び学年による差は見られなかった。自尊感情尺度得点に影響するのは、第4因子「物質的依存・効率性」であった。

〈考察〉 青年期の自尊感情の発達には、身近なモデルである両親の関係性が影響する。看護学生の自尊感情尺度得点は一般女子大生より高く、両親の結婚生活コミットメントへの認識についても「存在の全的受容・非代替性」という互いに敬意をもって受容しているという認知が高く、自尊感情の高低には、「物質的依存・効率性」因子が関与していた。

キーワード：看護大学生、自尊感情、両親の夫婦関係コミットメント

### I. はじめに

Eriksonの心理社会的発達理論によると、青年期は自我同一性を確立する時期であり、自分が自分であるという一貫性を確立する時期でもある<sup>1)</sup>。青年期の大学生は、学業での評価を受けること、進路や就職、異性関係など社会との関係で、他者から見られる自己と自己評価の平衡を築き上げていく時期である。自己評価と自尊感情とは深い関係にある。自尊感情は、人が自分についてどのように感じているか、評価しているかという感じ方であり、能力や価値を評価し維持する

機能である<sup>2)</sup>。

自尊感情の考え方は、日常生活の出来事に対応して変動する状態自尊感情と、時間や状況を通じた自尊感情の平均水準で比較的安定しているものに分けてとらえることが可能である<sup>3)</sup>。

Rosenbergは、自尊感情を自身で自己への尊重や価値を評価する程度の事ととらえており、短時間の状況に左右されない特定自尊感情として、その安定性を測定するための尺度を考案した。

本調査では、特性自尊感尺度として信頼性・妥当性

の高いRosenbergの邦訳版「自尊感情尺度（山本・松井・山城1982）」<sup>4)</sup>を使用して看護大学生の自尊感情を測定した。

親子関係は対人関係の基本であることから、子供のアイデンティティ形成や自尊感情と親子関係の在り方についての研究が行われてきた<sup>5)</sup>。例えば、父親・母親の言葉かけと青年期女子の自尊感情との関係では、青年期女子は母親の養育態度へのイメージが自尊感情に大きく寄与している<sup>6)</sup>。親へのネガティブな感情表出と抑うつ感の関係については、ネガティブな感情を制御する場合抑うつ感や自尊感情の低下と関連がある<sup>7)</sup>などが報告されている。

近年、結婚生活を継続するためにコミットメントが注目されているが、コミットメント認知尺度を使用した研究は少ない。

その中では、コミットメント認知尺度の作成の試みを始め<sup>8)</sup>、その尺度を使用した研究に、親の夫婦関係コミットメントへの認知が、子の異性との関係性の認知にどのように影響するかを研究したものがある。それによると、男性の場合は、両親の夫婦関係に対する認知がそのまま恋人との関係と関連するが、女性の場合はそうとは限らないという結果や<sup>9)</sup>、女子青年の不安は、親の結婚生活コミットメントについて負のイメージを抱いているほど強いという報告<sup>8)</sup>がある。このように、ある状況と両親の夫婦関係コミットメントの関連についての報告はあるが、子の自尊感情との関係を明らかにしたものはない。

そこで、本研究では、両親の夫婦関係や葛藤が子どもの自尊感情にどのように関係しているかを見るために、両親の結婚生活コミットメントの認知に着目し、自尊感情（自分を価値ある人間だと感じる）との関連性について検討する。

## II. 方法

都内A大学看護学部生1、2、4年生を対象にアンケート調査を実施した（集合調査）。実施時期は2012年9月～10月、質問内容は1.属性、2.両親の結婚生活コミットメント認知尺度（宇都宮、2005）3.自尊感情尺度（山本、松井、山城、1982）質問項目10項目（5件法）。倫理的配慮については、A大学の倫理審査委員会の承認を得、依頼文に目的、匿名性とプライバシーの守秘、回答の自由意志、データのコード化と事後破棄を記載し回答をもって同意されたと見做した。

〈心理測定尺度〉

### 1. 両親の結婚生活コミットメント認知尺度（宇都宮、2005）

両親の結婚生活に対するコミットメントを4つの次元から測定する尺度である。因子分析で得られた下位尺度、第1因子「存在の全的受容・非代替性」10項目、第2因子「社会的圧力・無力感」8項目、第3因子「永続性の観念・集団志向」6項目、4因子「物質的依存・効率性」4項目の合計28項目からなる。質問項目を、「当てはまる」5点～「あてはまらない」1点で答え、評定を合計して下位尺度得点とする。下位尺度ごとのクロンバック $\alpha$ 係数は、.72～.93と高く信頼性は確保されている。

### 2. 自尊感情尺度（山本、松井、山城、1982）

Rosenberg（1965）により作成された、10項目を山本らが邦訳した尺度で内的一貫性は確保されている。質問項目に対して、「当てはまる」5点～「あてはまらない」1点で答え、評定を合計して尺度得点とする。

## III. 結果

### 1. 属性（表1）

有効回答数374名（有効回答率85.8%）を分析対象とした。女性336名（89.8%）、男性38名（10.2%）、学年は1年151名（40.4%）、2年105名（28.0%）、4年118名（31.6%）であった。平均年齢20才（18才～29

表1. 属性

年齢 平均20歳, S D 1.63 (18歳 - 29歳)			
		人	%
性別 (n=374)	男性	336	89.8
	女性	38	10.2
学年 (n=374)	1年	151	40.4
	2年	105	28.1
	4年	118	31.6
家族 (n=301)	両親ときょうだい	192	51.3
	祖父母を含めた家族	73	19.5
	その他	36	9.6
両親の離婚を経験した (n=371)	はい	43	11.5
	いいえ	328	87.7
親との死別を経験した (n=372)	はい	21	5.6
	いいえ	351	93.9

才)、家族構成は、核家族192 (63.8%)、祖父母と同居73名 (24.3%) であった。家族の出来事として、親との死別を経験した21名 (5.6%)、両親の離婚を経験した43名 (11.6%) であった。

## 2. 自尊感情尺度得点 (表2)

自尊感情尺度の内容と各項目の平均得点は表2の通りである。これらの10項目の得点平均値は、33.1で、女性33.2、男性32.7と若干女性の得点が高かったが有意差はなかった。この自尊感情尺度得点の平均値33で高低群を2分し、属性との相関をみたところ、性別、学年別、年齢別、家族形態及び両親の離婚、親との死別経験の有無による差は見られなかった。

## 3. 両親の結婚生活コミットメント認知尺度の得点

本尺度は、青年期女子からみた両親の結婚生活の継続理由すなわち夫婦関係をどのように見ているかという質問内容である。質問紙は、父親用、母親用に分かれている。本研究では男子にも適用した。

### 1) 因子分析結果

本尺度は宇都宮 (2005) によって全28項目

4因子構造の信頼性が確保されているが、本調査でも追試をおこなった。主因子法、Kaiserの正規化を伴うバリマックス回転をおこない、因子数を4とした (累積寄与率57.1%父親 / 57.0%母親)。4因子の内容は、父親では第1因子、第2因子、第4因子に各々1項目を除いて宇都宮と一致した。母親は第1因子、第2因子、第3因子に計5項目を除いて一致した。父親の因子分析結果を表に示す。因子の異動は\*で示した (表3)。

しかし、次に述べる下位尺度得点の比較において

は、同質性を確保するために、宇都宮<sup>10)</sup>の因子構成項目にしたがって解析を行った。

### 2) 下位尺度得点の平均値と相関 (表4、5)

第1因子「存在の全的受容・非代替性」34.4 / 32.3 (父親 / 母親)、第2因子「社会的圧力・無力感」17.8 / 19.6 (父親 / 母親)、第3因子「永続性の観念・集団志向」17.8 / 18.2 (父親 / 母親)、第4因子「物質的依存・効率性」11.9 / 11.6 (父親 / 母親) であった。

父母それぞれの因子間の関連性をみるために尺度得点の相関係数を算出したところ、父親では、「存在の全的受容・非代替性」と「社会的圧力・無力感」に負の相関、「社会的圧力・無力感」と「永続性の観念・集団志向」及び「物質的依存・効率性」に正相関、「永続性の観念・集団志向」依存・効率性」に正の相関があった。

母親では、「存在の全的受容・非代替性」と「社会的圧力・無力感」に負の相関、「社会的圧力・無力感」と「永続性の観念・集団志向」及び「物質的依存・効率性」に正相関が見られた。

次に、両親の下位尺度の相関を見たところ

因子の多くに相関がみられるが、特に強い相関を認めたのは、父母の「存在の全的受容・非代替性」( $r = .840, p < .01$ )、「社会的圧力・無力感」( $r = .762, p < .01$ )、「永続性の観念・集団志向」( $r = .716, p < .01$ )であった。

つまり4因子中、「物質的依存・効率性」を除いた3因子で、父親のコミットメント因子得点が高いほど母親のコミットメント因子得点も高いという傾向を示した。

表2. 自尊感情の平均値

項目	n	平均値	標準偏差
少なくとも、人並みには価値のある人間である	372	3.77	1.047
いろいろな良い素質を持っている	372	3.37	.987
敗北者だと思ふことがよくある	372	2.91	1.170
物事を人並みには、うまくやれる	370	3.36	.962
自分には、自慢できるところがあまりない	371	3.27	1.099
自分に対して肯定的である	372	3.15	1.050
だいたいにおいて、自分に満足している	372	2.90	1.134
もっと自分自身を尊敬できるようになりたい	370	3.99	1.055
自分は全くだめな人間だと思ふことがある	370	3.40	1.213
何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ。	372	3.01	1.063

表3. 父親の結婚生活コミットメント認知尺度の因子分析

質問項目	因子			
	因子1 存在の全 的受容・ 非代替性	因子2 社会的圧 力・無力 感	因子3 永続性の 観念・集 団志向	因子4 物質的依 存・効率 性
父にとって母はかけがえのない存在だから	.833	-.239	.100	.028
母のことを本当に愛しているから	.829	-.216	-.016	.040
母のことを最高の伴侶と思っているから	.808	-.151	-.005	-.026
母を誰よりも信頼しているから	.811	-.271	.090	.037
母が大変なとき、そばにいて支えてあげたいと思っているから	.784	-.057	.028	-.192
母の考えや気持ちをいつも共有してあげたいと思っているから	.764	.016	-.027	-.176
母の人柄に強い魅力を感じているから	.755	-.244	.070	.032
母を一人の人間として深く尊敬しているから	.728	-.235	-.015	-.002
母のことをあるがまま受け入れられるから	.719	-.082	.060	-.124
母のことを自分の精神的な拠り所としているから	.662	-.076	.048	.184
惰性で持ちこたえている	* 2 因子 -.471	.253	.104	.192
たとえ離婚を求めても、どうせ相手が承諾してくれないから	-.123	.647	.130	.075
これが自分の運命と思い、あきらめている	-.296	.592	.057	.219
別れると母がかわいそうだから、同情で一緒にいてあげている	-.134	.586	.231	.041
離婚の手続きが面倒だから	-.313	.582	.011	.269
人生の試練と思い、必死に耐えている	-.309	.520	.240	.156
離婚は恥ずべきことと考えているから	-.157	.494	.322	.258
誰と結婚しても似たり寄ったりだから	-.311	.472	.058	.479
身内や結婚でお世話になった方々に申し訳ない	* 3 因子 -.151	.442	.424	.224
家族の分裂は避けたいと思っているから	-.013	.077	.776	.109
子供に辛い思いをさせたくない	.093	.094	.639	-.091
今まで積み上げてきたものを台無しにしたくない	.100	.183	.569	.383
いちど結婚した相手とはどんなことがあっても、離婚すべきではないと考えている	.081	.304	.528	.209
ひとりで生きていく自信がない	-.129	.282	.011	.648
一人の生活は何かと不便だから	-.219	.389	.114	.630
母がいろいろと役に立つから	.249	-.027	.274	.545
生活の安定のため	.120	.170	.454	.476
離婚しても、幸福が約束されているわけではないから	* 2 因子 -.065	.336	.355	.418

\* 宇都宮の因子

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

累積寄与率 57.1%、最小固有値 1.331

表4. 両親の結婚生活コミットメント認知尺度の平均値および標準偏差

因子名	平均値	標準偏差	N	平均値 宇都宮 2004 (N=136)	標準偏差
父因子1【存在の全的受容・非代替性】	34.43	9.51	304	23.47	8.18
父因子2【社会的圧力・無力感】	17.77	6.08	303	30.83	6.00
父因子3【永続性の観念・集団志向】	17.82	5.33	304	15.99	4.65
父因子4【物質的依存・効率性】	11.94	3.78	307	10.63	3.83
母因子1【存在の全的受容・非代替性】	32.33	10.79	303	24.47	9.88
母因子2【社会的圧力・無力感】	19.61	6.88	304	29.97	6.77
母因子3【永続性の観念・集団志向】	18.20	5.59	305	15.77	5.44
母因子4【物質的依存・効率性】	11.58	3.50	305	10.92	3.75

## 3) 下位尺度得点の男女差、学年差

4 因子の尺度得点の男女差及び学年による差を見ると、5%水準で有意差は認めなかった。

## 4. 自尊感情尺度得点と両親の結婚生活コミットメント認知尺度との相関

子どもから見た、両親の「結婚生活コミットメント」の認知が自尊感情尺度得点とどのような関連があるかを見るために、従属変数を「自尊感情尺度得点」とし、影響を及ぼす独立変数に両親の「結婚生活コミットメント認知尺度」下位尺度得点をおき、重回帰分析を行った。その結果、父親の第4因子「物質的依存・効率性」が関連していることが分かった。(R<sup>2</sup> = .221, β = .157, 95%信頼区間 下限.063-上限.291, p = .002)

## IV. 考察

## 1. 親の夫婦関係へのコミットメントに対する看護大学生の認知の特徴について

子どもの発達や心理的な問題に関しては、親の養育態度やその背景にある家族システムに関する内外の研究が行われてきた。コミットメントという概念も研究者によって若干相違があるものの、コミットメントは関係維持に向けた要因として考えられている。そのような中で、結婚生活を継続するためのコミットメントが注目されている<sup>10)</sup>。

「両親の結婚生活コミットメント認知尺度」の下位尺度得点は、宇都宮10の値と比較すると第1因子「存在の全的受容・非代替性」が高く、第2因子「社会的圧力・無力感」は低く、第3因子「永続性の観念・集団志向」、第4因子「物質的依存・効率性」も低値であった。

表5. 父親・母親の結婚生活コミットメント認知尺度の相関係数

	父因子1 存在の全 的受容・ 非代替性	父因子2 社会的圧 力・無力 感	父因子3 永続性の 観念・集 団志向	父因子4 物質的依 存・効率 性	母因子1 存在の全 的受容・ 非代替性	母因子2 社会的圧 力・無力 感	母因子3 永続性の 観念・集 団志向	母因子4 物質的依 存・効率 性
父因子1【存在の全的受容・非代替性】								
父因子2【社会的圧力・無力感】	-.500**							
父因子3【永続性の観念・集団志向】	-.052	.519**						
父因子4【物質的依存・効率性】	-.060	.558**	.509**					
母因子1【存在の全的受容・非代替性】	.840**	-.452**	-.059	-.196**				
母因子2【社会的圧力・無力感】	-.360**	.762**	.539**	.610**	-.478**			
母因子3【永続性の観念・集団志向】	.068	.409**	.716**	.466**	.079	.539**		
母因子4【物質的依存・効率性】	.028	.404**	.514**	.395**	.117*	.409**	.576**	

Pearsonの相関係数

\*\* 1%水準で有意 (両側)

\* 5%水準で有意 (両側)

この傾向は、父親、母親ともに同じであった。

第1因子「存在の全的受容・非代替性」という因子は、「母(父)をあるがままに受け入れられる、母(父)を一人の人間として深く尊敬している」という内容から成っており、性愛のみならず人間の結びつきとして、信頼、敬愛といった理想的な在り方を意味する。

第2因子「社会的圧力・無力感」は、「惰性で持ちこたえている、運命だとあきらめている、同情と一緒にいる」など、抗えない諦念を意味する。

第3因子「永続性の観念・集団志向」は、離婚は恥ずべきこと、子供に辛い思いをさせたくない、家族の分裂は避けたい」など夫婦の関係以外の外的規制や建前によって結婚生活が継続されていることを意味するが社会制度への順応でもある。

第4因子「物質的依存・効率性」は、結婚生活の継続のためには、利便性や役割という互いへの依存、協力が必要とされることを意味する。

これらの平均値の比較は、研究報告が少ないため、信頼性に乏しい面もあるが、その限りで今回の調査対象の看護大学生は、両親の結婚生活コミットメントをポジティブに評価していると考えられる。

4因子と夫婦関係の良好さとの関係を見た宇都宮の結果では、4因子の中で、唯一、第1因子「存在の全的受容・非代替性」が強い正相関を示しており、第2因子「社会的圧力・無力感」は比較的強い負の相関を示していた<sup>10)</sup>。

子供から見ても夫婦関係の良好さは、「存在の全的受容・非代替性」の高さであり、逆に「社会的圧力・無力感」の高さは、夫婦関係が良好でないと感じていることを示していた。これから類推すると、本調査の対象である看護大学生は、両親の夫婦関係について、互いの人格を尊重しあうことを基盤にして継続されていると認知していることが示唆される。

次に因子の内部相関では、父親、母親各々の相関は同じ傾向を示した。「存在の全的受容・非代替性」の得点と「社会的圧力・無力感」の得点は負の相関であり、その「社会的圧力・無力感」は、「永続性の観念・集団志向」、「物質的依存・効率性」と正相関する。

次に、父親、母親合わせた因子相関でも、父母の「存在の全的受容・非代替性」の相関、父母の「社会的圧力・無力感」の相関、父母の「永続性の観念・集団志向」の相関が高かった。

これから、子どもは父親、母親に対して同じ価値観をもって相互的に評価していることがわかる。

## 2. 親の夫婦関係へのコミットメントに対する看護大学生の認知と自尊感情の関連について

親の夫婦関係のコミットメントをポジティブにとらえているものは(第1因子の高得点、第2因子の低得点)自尊感情も高い値を示すだろうという予測のもとに分析をした。

自尊感情(self-esteem)とは、「自分自身を価値ある者だと感じる感覚」(心理学事典<sup>11)</sup>)であり、自分には価値があり、尊敬されるべき人間であるという感情をいう。自尊感情の高低は、困難に対処する能力、適応力、感情の不安定さなどと関連することが報告されている。

看護大学生の自尊感情は総じて高い値を示していた。そして性別、学年別、年齢別、家族形態及び両親の離婚、親との死別経験の有無による差は見られなかった。

医療職という目的意識が明確で、大学生という経済的・家庭的にも比較的恵まれた同質的集団であったことが影響しているだろう。両親の離婚、親との死別経験などは、その出来事からの経過年数なども考慮する必要があったと思われる。また、自尊感情は、知性や知的欲求の充足や過去の成功/願望によって規定されるので、これらも自尊感情を高める要因になっていると考える。

更に、女子青年の自尊感情は、両親が良好な関係であるほど高い事が明らかになっている<sup>12)</sup>。本研究では両親の結婚生活へのコミットメントの下位尺度項目のどれが自尊感情の高低に関係するかについて分析した。重回帰分析の結果は、自尊感情に影響を与えるのは、父親の第4因子「物質的依存・効率性」であった。予測変数であった「存在の全的受容・非代替性」は棄却されたが、「物質的依存・効率性」は、現実の生活においてお互いを必要としていることを意味し、「存在の全的受容・非代替性」という人格的評価とは異なった機能的な視点で配偶者へのコミットメントを表していると考えられる。

## V. 結論

1. 看護大学生は両親の結婚生活へのコミットメントを、「社会的圧力・無力感」としてではなく「存在の

全的受容・非代替性」「永続性の観念・集団志向」、「物質的依存・効率性」としてとらえていた。

2. 看護大学生の自尊感情は高く、両親の結婚生活へのコミットメント認知との関係では、父親の「物質的依存・効率性」との関連が高かった。

以上、概ね親の夫婦関係のコミットメントを良好と認知していたが、個別には「社会的圧力・無力感」の得点が高い学生の抱える問題などが存在すると考える。今後の課題としたい。

最後に、調査に協力していただいた学生の皆様に感謝致します。

#### 【文献】

- 1) 岡本祐子編著：女性の生涯発達とアイデンティティ。北大路書房，2010。
- 2) 伊藤裕子：青年期女子の性同一性の発達—自尊感情、身体満足度との関連から—，教育心理学研究，49，458-468，2001。
- 3) 阿部美帆，今野裕之：状態自尊感情尺度の開発，パーソナリティ研究，16(1)，36-46，2007。
- 4) 堀 洋道監修，山本真理子編集，心理尺度集 I—人間の内面を探る，自己，個人的過程—〈自尊感情尺度 山本・山城・松井（1982）〉サイエンス社，2001。
- 5) 船曳友愛，岡村寿代：青年期の自己愛特性・自尊感情の変動性と心理的不適応の関連，発達心理臨床研究，(18)，43-51，2012。
- 6) 小川 由希子，山田 智世，杉山 里美，上岡 美紀，平田 裕美父親・母親の言葉かけと青年期女子の自尊感情との関連：影響を及ぼしているのは父親、それとも母親、女子栄養大学紀要，(42)，35-41，2011。
- 7) 大島聖美：妻から夫への信頼感が青年期後半の娘の心理的健康に与える影響，発達心理学研究，20(4)，51-361，2009。
- 8) 宇都宮 博：女子青年の不安と両親の結婚生活に対するコミットメント，日本教育心理学会総会発表論文集，(43)，427，2001。
- 9) 夏目 寧子：両親の夫婦関係と子どもの異性関係に関する研究—コミットメントを中心に，名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要，心理発達科学 (53)，243-245，2006。
- 10) 宇都宮 博：女子青年における不安と両親の夫婦関係に関する認知—子どもの目に映る父親と母親の結婚生活コミットメント，教育心理学研究，53(2)，209-219，2005。
- 11) 中島義明他編集：心理学辞典，有斐閣，1991。
- 12) 船曳友愛，岡村寿代：青年期の自己愛特性・自尊感情の変動性と心理的不適応の関連，発達心理臨床研究，(18)，43-51，2012。

(2013年10月17日受付、2013年12月2日受理)

## Relation to the recognition of the commitment to the marital relationship of parents and self-esteem of nursing college students

Yoko TONE<sup>1</sup>, Rieko SUGITA<sup>1</sup>, Sachiko ONODERA<sup>2</sup>  
Aya OHKUBO<sup>3</sup>, Yoshiye SINOHARA<sup>2</sup>, Chikako MOCHIZUKI<sup>2</sup>

1 Mejiro University, 2 Teikyo University, 3 Ochanomizu University

### 【Abstract】

**Objectives** : The aim of the study is to clarify the relationship between self-esteem and perception of the marital relationship to the commitment of parents, as seen from a child during adolescence.

**Methods** : Response of the 374 nursing college students (Valid response, 85.8%) in Tokyo were analyzed for the self-esteem scale (Yamamoto, 1982), and marital relationship commitment recognition measure of the parents(Utsunomiya, 2005).

**Results** : The self-esteem scale scoring average is 33 , There was no significant difference by attribution .The Score of parents' marriage commitment cognition scale were , the first factor“whole acceptance of being/one and only”was 34.4/32.3 (father / mother), the second factor “social pressure/powerlessness” was 17.8/19.6 (father / mother), the third factor “idea of permanence/group orientation” was 17.8/18.2 (father / mother), the fourth factor“material dependence/efficiency”was 11.9/11.6a (father / mother). The fourth factor to affect the self-esteem scale scores was “substance dependence and efficiency”. The factors' affecting the score of self-esteem was the fourth factor "Efficiency and substance dependence".

**Conclusion** : Self-esteem scores of nursing students were higher than the general college student. About the marital relationship of parents they were receptive respectfully.